中丹地域における８世紀の竪穴住居跡

藤　原　敏　晃

1.　はじめに

畿内においては，既に７世紀になると掘立柱建物が一般化するといわれるが，東国では平安時代にも依然として，竪穴住居が一般的に使用されているようである。このことは，西国に比べ東国の後進性を示す一例として捉えられよう。

竪穴住居から掘立柱建物への移行は，建築史上大きな問題となっているのみならず，当時の社会状況と大きく関わる一つの画期的な変移として理解される。

小稿では，この画期を考える上で新たな資料を提示した，８世紀を中心とする中丹地域の竪穴住居跡例を紹介し，その集落の一端を考えるヒントとしたい。

なお，中丹地域とは，綾部市，福知山市を中心とした地域を指すが，調査例の大部分は綾部市に集中しており，福知山市の例は非常に少ない。従ってこの小稿では，綾部市の例を中心として論述する。

2.　当地域の須恵器分類案

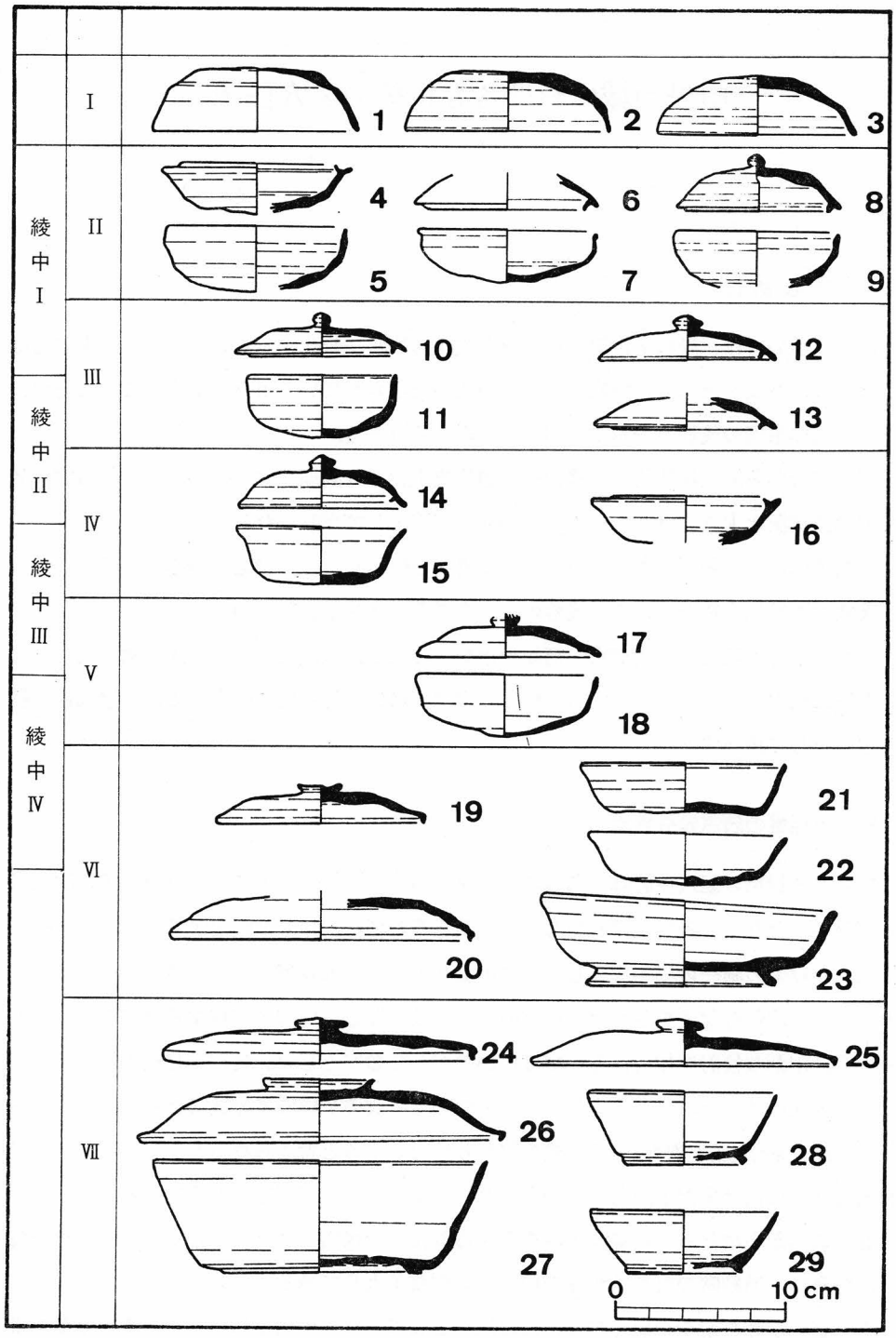
まず，８世紀の竪穴住居跡であることを決定づける資料としての土器分類案を，次に示してみる。ただし，資料上の制約もあり，須恵器の杯身，杯蓋に限定する。当地の７～８世紀にかけての唯一の編年案として，綾中廃寺出土須恵器編年試案(注1)がある。この試案をもとに，型式的な分類案(注2)を示したものである。地域的問題，同時に存在する型式を分ける可能性等，細かな検討を加えたものではないので，分類案とした。綾部市で調査された７～８世紀の住居跡，土坑から出土した遺物について，次の７段階に分類できる。

Ⅰ　陶邑編年(注3)(以下陶邑)のⅡ型式の終わりに対応すると考えられるもので，蓋のみの資料である。口径はまだ小型化していないが，粗雑化が進んだ形態のものである。

Ⅱ　器形が小型化し，宝珠つまみを有する蓋は，口縁端部より下方にのびたかえりを持つ。杯身は，前段階のたちあがりを持つものが残るようである。

Ⅲ　蓋のかえりがやや短くなり，口縁端部と同じくらいの長さになる。やや扁平なつまみも出現する。

Ⅳ　蓋のかえりが次第に短くなり，蓋に付されるつまみもやや扁平なものに変化してい



第１図　　須恵器分類案 AM：青野南 AK：綾中 AN：青野 KM：久田山

1：AMSB8101，2～3：AMSK8213，4～5：KM住居２，6～7：AKSB8108，8～9：AMSB8114，10～11：AMSK8207，12～13：AMSB8108，14～16：ANSB8103，17～18：AKSB8107，19：AKSB8106，20～21：AMSK8214，22～23：AKSB8106，24：AMSB8206，25：AN４号住居，26：AMSK8205，27～29：AMSK8205

る。身は，前段階の蓋を身にした印象の形態のものと，平底のものがある。平底で口縁部が外反気味にのびるものが新しい。

Ⅴ　蓋のかえりがほとんど消滅しかけている。身は，この段階でも古い型式が残っている。

Ⅵ～Ⅶの段階は，陶邑のⅣ型式に対応すると考えられるものである。

Ⅵ　蓋の内面のかえりが消滅する。丸みを有した天井部から屈曲させた端部に続く。身は，前段階の蓋を逆転させたものはなくなる。また，比較的高い高台を持つものがある。

Ⅶ　24，25の蓋は，天井部のふくらみが消え，平坦に近くなる。つまみも，より扁平なものが付けられている。26の蓋は，天井部からカーブを描き，端部で下方へ屈曲させる。つまみは輪状のものが付き，身は，口縁部が上方へのび，高台も底部の端に寄る。

以上が，各分類案の遺物の概要であるが，年代については，綾中廃寺須恵器編年試案によると，綾中Ⅰは，650～660年代，綾中Ⅱは，660～670年代，綾中Ⅲは，670～680年代，綾中Ⅳは700年前後とされている。

当案のⅦに関しては，陶邑編年や，亀岡市篠窯址群などから推して，８世紀後半とすべきだろう。従って，Ⅵは８世紀前半と考えられる。

以上，綾中廃寺須恵器編年試案より，やや新しい時期を含めて見ておいた。

3.　８世紀の竪穴住居跡検出遺跡

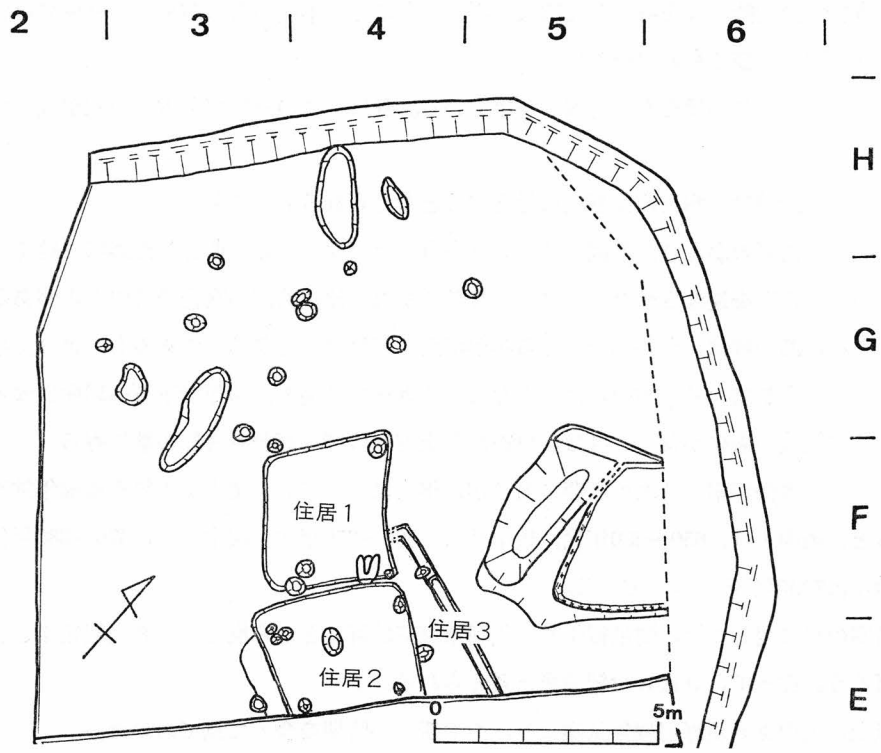
多保市遺跡(福知山市字多保市小字薬王寺)　福知山市の南東部に所在する。これは，1985年度に，京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査を行った遺跡である。調査面積約350m²にすぎない狭い面積のものではあるが，奈良時代と考えられる竪穴住居跡を３棟分検出した。

住居１　南北約３ｍ，東西約3.4ｍを測る，方形の竪穴住居跡である。北東コーナー部に造り付けのカマドを持つ。柱穴に関しては不明である。(注4) 床面から検出した遺物として第３図がある。これはⅦに当たる遺物と思われる。

住居２　東西約3.2ｍを測る方形を呈するものと思われる。東辺を欠くため，カマドについては不明である。柱穴についても不明である。(注5)

住居３　住居１と２に切られたもので方形を呈する。南北約5.0ｍを測る。周溝を有する。

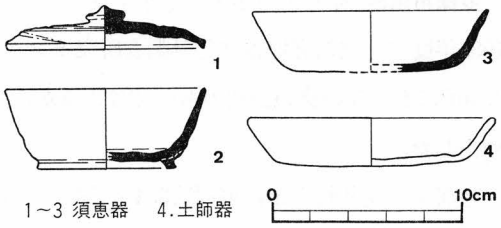
住居２・３に関しては，年代を推定する良好な遺物を発見できなかったが，住居１に近い年代と推定しておく。この多保市遺跡の調査により，８世紀にも中丹地域では，竪穴住居が存在したことが知られる。



第2図　多保市遺跡

次に，調査例の多い綾部市の8世紀の情況について検討してみよう。

綾中遺跡(注6)　ここでは，7世紀中葉頃から8世紀にかけて竪穴住居が営まれ，同時に掘立柱建物も存在していた。ここでは倉と住居，各2棟が検出されている。



1～3 須恵器　4.土師器

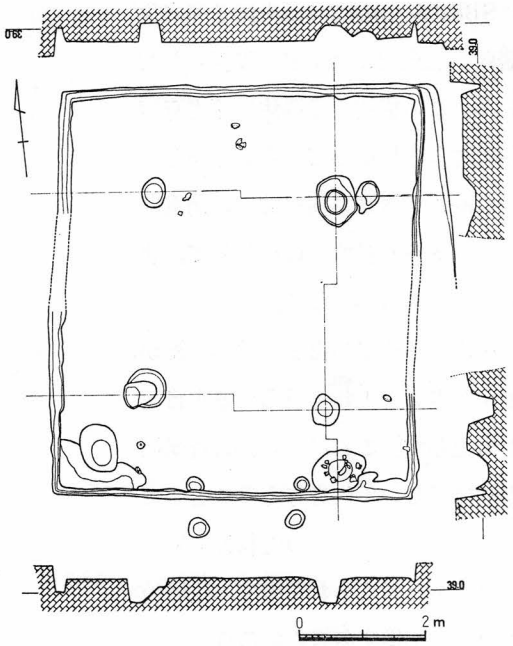
第3図　住居1出土遺物

竪穴住居跡SB8106　分類案Ⅵの遺物を出土した。ここの住居跡群の中で最も新しいものである。東西5.8m，南北6.5mで長方形を呈する。カマドは不明であるが「青野型住居跡」(注7)とは考えられない。主柱穴は4基見られ，周壁は，幅10cm～20cmの溝を伴う。SB8106に切られる形でSB8110があるが，規模等は不明である。なお，掘立柱建物SB8112があるが，これがこのSB8106に切られている可能性がある。

青野南遺跡(注8)　ここでは，7世紀代を中心とした竪穴住居跡のほかに，A群およびB群という2時期にわたる掘立柱建物群の存在が推定されている。

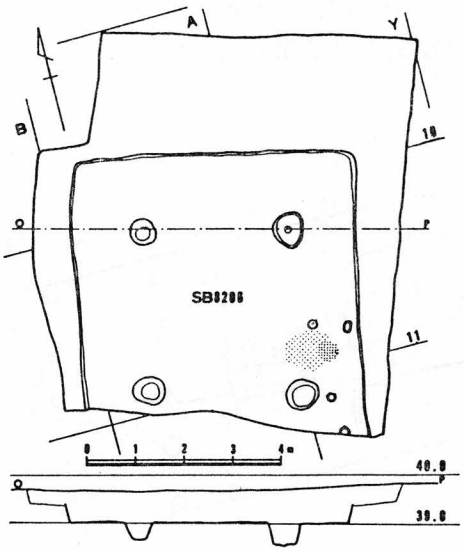
Ｂ群については，建物の規模・配置・方位の統一性などにより，何鹿郡衙跡の可能性が強いと推定されている。その年代については，綾中廃寺の創建年代(注9)を参考にするなら，７世紀後半になる。

Ａ群については，Ｂ群との切り合い等からＢ群に先行する集落，あるいは豪族クラスの居宅である可能性が指摘されている。年代は，７世紀中葉頃のものと考えられる。青野南遺跡が，当地の中心地であったことは，まちがいないであろう。

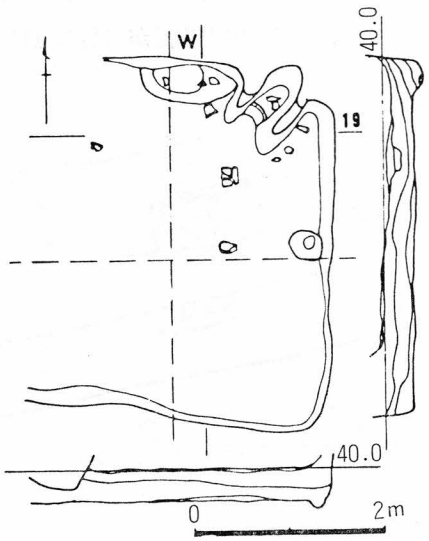


第４図　綾中遺跡SB8106・8110実測図

SB8206　分類案Ⅶを出土した竪穴住居跡である。南辺が調査地外のため不明であるが，東西5.8mを測る。４本の主柱穴があった。南東ピット北側には丸い焼土の広がりが認められる。造り付けカマドではなく，土師製の移動式カマドの使用が考えられている。



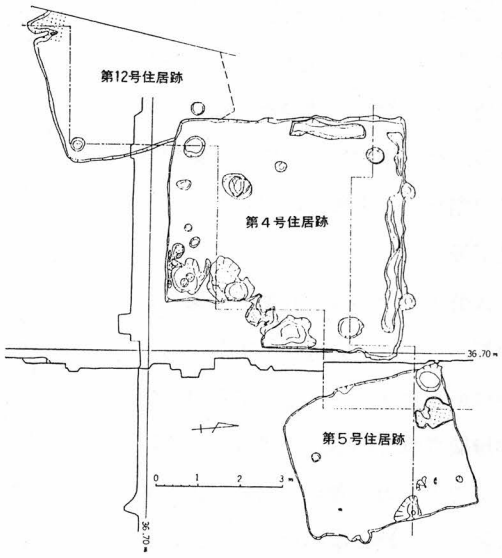
第５図　青野南遺跡SB8206実測図



第６図　青野南遺跡SB8205実測図

SB8205　南北3.8mを測る竪穴住居跡。北東隅にカマドが設置されている。この構造，設置法は「青野型住居跡」と類似している。しかし，一般的に「青野型住居跡」が南東隅にカマドを設置するのに対して，北東隅にある点が異なる。

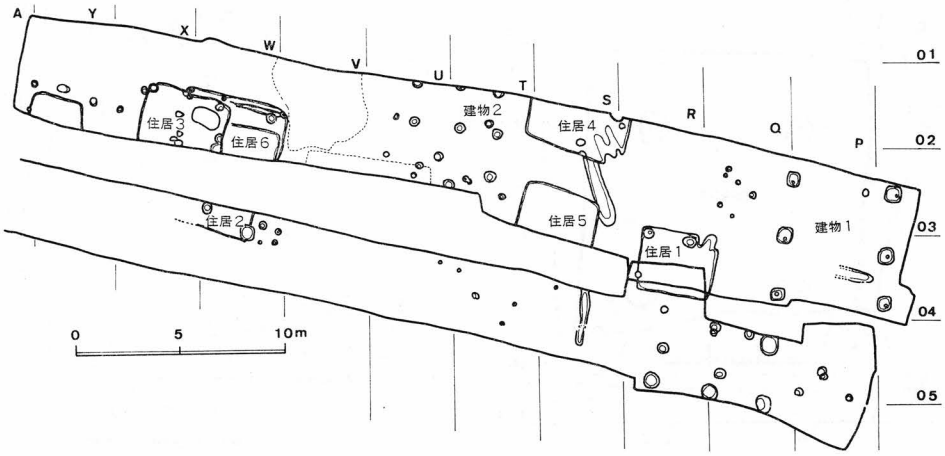
床面から土器は出土しなかったが，綾中廃寺丸瓦Ⅰ類(注10)と見られる布目瓦が出土した。これにより，天智朝頃よりは新しい年代を与えることができる。また，埋土中の遺物は，Ⅶに当たる頃と考えられるので，住居の下限年代を推す参考となろう。



第７図　青野遺跡Ａ地点第４・５・12号住居跡実測図

青野遺跡(注11)　弥生時代から平安時代にかけて遺構・遺物に濃淡の差こそあれ，集落が継続して営まれた遺跡である。特に，７世紀から８世紀にかけて爆発的に遺構・遺物が出現するが，目立った掘立柱建物は見られない。

青野遺跡Ａ地点４号住居　Ⅶ段階の分類案の遺物を出土した竪穴住居跡であり「青野型住居跡」と見られるものである。南東部にカマドを持つ。南北5.6m，東西5.7mである。北辺と西辺で，壁に沿って浅いＵ字溝が検出された。主柱は，４本よりなるものと推定されている。土器の出土位置が不明な点に問題は残るが，８世紀前半代のものと考えられる。



第８図　西町北大坪遺跡

西町北大坪遺跡(注12)　1985年度，綾部市教育委員会によって調査が行われた遺跡であり，綾中遺跡の西側に位置している。竪穴住居跡６基，掘立柱建物２棟(内１棟は倉庫と考えられる。）が検出されている。

住居１　3.6m×3.0mの長方形を呈する竪穴住居跡。北東隅でカマドが検出されているが，カマドの位置が隅に寄っていることから「青野型住居跡」の退化形式であると思われる。

住居２・３・６　三基が重複した型で検出された。全掘されていないが，住居２が南北５m，住居３が東西4.1m，住居６が東西5.1mの規模を有する。およそ方形の竪穴住居跡と思われる。切り合い関係から，住居２→６→３の順に建てられた可能性が強い。

住居５　東西3.7mを測る方形の竪穴住居跡である。

これらの竪穴住居跡は，多少の時期差はあるにせよ，短期間に集中して営まれ，集落を形成しているものと推定されている。出土遺物は，分類案のⅦに該当すると考えられる。

これらの遺跡の位置関係は第９図にある。青野南，綾中遺跡を中心に，周囲に青野，西町北大坪遺跡が位置する。西町北大坪遺跡については，この調査地の西側において，次第に低地化することが判明し，集落の西限が確認された。青野遺跡については，旧由良川が，９世紀までは遺跡の西南側を流れていた可能性が高く(注13)，そのため青野南，綾中遺跡とは明らかに画されていたと云え，中心的な地ではなかったと考えられる。

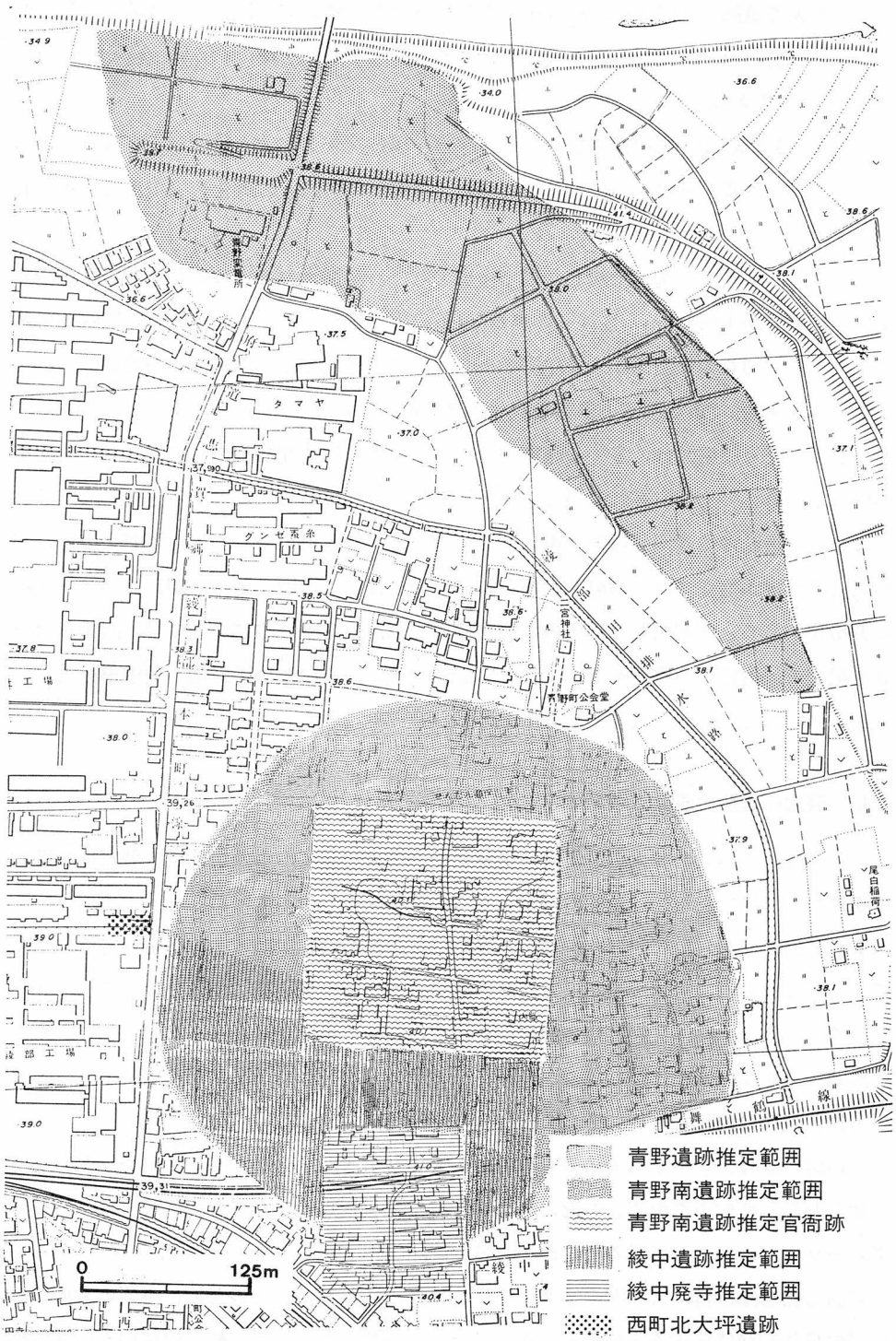
4.　竪穴住居跡の規模について

それでは，前述した８世紀の竪穴住居跡について検討してみたいが，まず竪穴住居跡の規模について見てみたい。比較の対象として７世紀代のものも加えた。

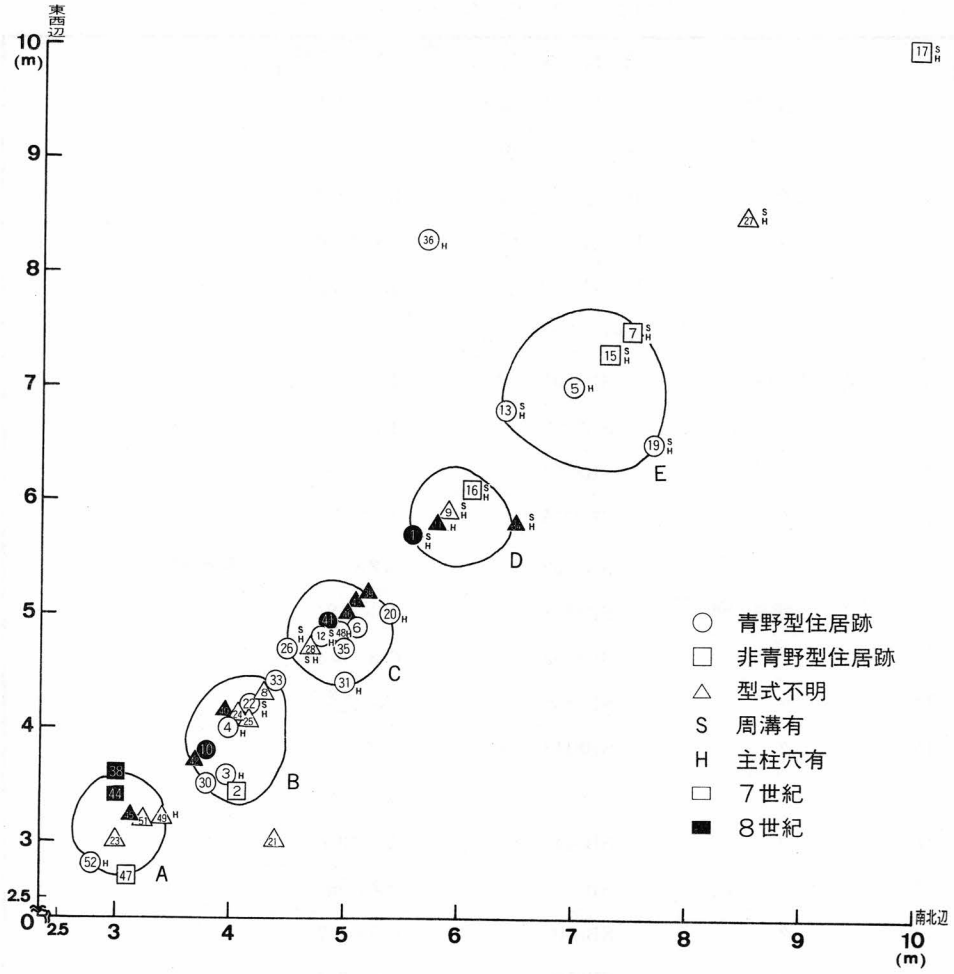
７～８世紀の竪穴住居跡は，綾部市青野町，綾中町を中心に比較的まとまって検出されている。これらに，福知山市多保市遺跡の資料を加えて，規模別にまとめたものが第10図である。これは，横軸に竪穴住居跡の南北長を，縦軸に東西長をとったものである。一辺しか確認できないものについては，便宜上正方形のものとして作図した。加えて，主柱穴の有無，周溝の確認されているもの，「青野型住居跡」の別も記入した。

この図により，小型から大型のものまで，大まかにＡ～Ｅの５グループ(注14)に分かれることが知られる。綾部市を中心とした，当地域特有とも云うべき「青野型住居跡」は，Ａ～Ｅグループ全てにわたって見ることができる。

周溝は22を除けば，Ａ・Ｂの２グループでは認められない。そのため，小型のものでは，住居の構造が簡略化するといえる。そのことは，小型のものでは主柱穴のないものが多いこととも関係があろう。



第９図　　青野・綾中地区遺跡群位置図（Ｓ＝１）



第10図　　７～８世紀における竪穴住居跡規模別分布図

この竪穴住居跡の年代について見てみると，大型のＥグループは，７世紀代のものしか存在しない。その他の各グループには，８世紀代の竪穴住居跡が存在していることがわかる。そこで，次にこの規模の大小の差が存在する理由について考えてみよう。

各グループの最大・最小のものについて，それも東西辺の長さの比較を行ってみる。

Ａの最小は住居跡No.52，最大は49，Ｂは最小30，最大33，Ｃは最小26，最大20，Ｄは最小１，最大16，Ｅは最小13，最大７とすると，各差は第11図のようになる。

これで見ると，各グループ間の最小と最大の住居跡の差は，Ｂ－Ａ，Ｃ－Ｂが30cm，Ｄ－Ｃ，Ｅ－Ｄが70cmという値になる。１尺を唐大尺の約30cmと考えると，Ｂ－Ａ，Ｃ－Ｂ間は１尺，Ｄ－Ｃ，Ｅ－Ｄ間は５cmの誤差を持つが2.5尺というかなり規則的な数値となった。さらに，各グループの最大のものの差を比較してみると，Ｂ－Ａが120cmで４

第1表　竪穴住居跡一覧

No.	遺跡名	遺構番号	規模(東西×南北) m m	注記
1	青野A地点	4号住居	5.7×5.6	
2	〃	5号住居	3.5×4.0	
3	〃	6号住居	3.5×4.0	
4	〃	12号住居	4.0×4.0	
5	〃	13号住居	7.0×7.0	
6	青野4次	XI地点トレンチ3	?×5未満	
7	青野南3・4次	SB8201	7.5×?	
8	〃	SB8202	4.3×?	
9	〃	SB8203	?×5.9	
10	〃	SB8205	?×3.8	
11	〃	SB8206	5.8×?	移動式かまど
12	青野南	SB8101	?×4.8	
13	〃	SB8102	6.8×6.4	
14	〃	SB8106	不明△$^{S}_{H}$	
15	〃	SB8113（旧）	7.3×?	
16	〃	〃（新）	6.1×?	
17	〃	SB8114	?×10.0	
18	青野5次	SB8101	不明○H	
19	〃	SB8102	6.5×7.7	
20	〃	SB8103	5.0×5.4	
21	〃	SB8104	3.0×4.4	
22	〃	SB8105	?×4強	
23	綾中廃寺	北地区SB01	?×約3	
24	〃	〃 SB02	?×4.1	
25	〃	〃 SB03	?×4.1	
26	久田山	N地区1号住居	4.7×4.5	
27	〃	〃 2号住居	8.5×?	
28	〃	〃 3号住居	4.7×?	
29	綾中	SB8101	不明□	
30	〃	SB8102	3.5×3.8	
31	〃	SB8103	4.4×5.0	

No.	遺　跡　名	遺跡番号	規模(東西×南北) m　m	注　記
32	〃	SB8104	不明○H	
33	〃	SB8105	4.4×？	
34	〃	SB8106	5.8×6.5	
35	〃	SB8107	4.7×5.0	
36	〃	SB8108	8.3×5.7	
37	〃	SB8109	不明○	
38	西町北大坪	住居 1	3.6×3.0	かまど
39	〃	住居 2	？×5.2	
40	〃	住居 3	4.1×？	
41	〃	住居 4	4.9×？	かまど
42	〃	住居 5	3.7×？	
43	〃	住居 6	5.1×？	
44	多保市	SH01	3.4×3.0	かまど
45	〃	SH02	3.2×？	
46	〃	SH03	？×5.0	
47	青野6・7次	SB8111	3.1×2.7	
48	〃	SB8112	？×4.9	かまど
49	〃	SB8113	3.2×3.4	
50	〃	SB8114	不明△	
51	〃	SB8115	3.2×？	
52	〃	SB8116	2.8×？	かまど

	A		B		C		D		E	
住居跡No.	52	49	30	33	26	20	1	16	13	7
東西長(m)	2.8	3.2	3.5	4.4	4.7	5.0	5.7	6.1	6.8	7.5

較差(各グループ間)　0.3m　0.3m　0.7m　0.7m

較差(最大値比較)　1.2m　0.6m　0.9m　1.4m

第11図　竪穴住居跡比較図

尺，C－Bが60cmと2尺，D－Cが90cmで3尺，E－Dが140cmで70cmの2倍となっている。あたかも何らかの規制の上に住居が建てられた印象さえ受ける。

例えば，Bグループは，Aより一辺がプラス4尺までの大きさの住居規模が許される，CはBよりプラス2尺，という具合に，各グループが規制されていたということが考えられるのではないか。そして，各グループ間には，先の1尺，2.5尺という差もまた設けられていたのである。規制といったものでなくとも，ある者は何尺までの住居に居住するという集落内の不文律といったものの上で住居が建築されていたことを，この数値は示しているのではないだろうか。このことは，階層の分化と関連しているのであろう。

5.　8世紀の竪穴住居跡

前述の推論がある程度正しいものとして，8世紀の竪穴住居跡について検討してみたい。

8世紀とした竪穴住居跡が，大型のEグループに見られないことは，先にも触れた。Eグループの住居跡の年代を見てみると，少なくとも7世紀後葉には作られなくなったのであろう。このことは，青野南，綾中遺跡の概略で触れたように，7世紀中葉段階から掘立柱建物が出現することと関連があるものと考えられる。すなわち，7～8世紀において，掘立柱建物が竪穴住居より高度な技術を要し，その背景に経済的優位性があると云えるなら，この優位なEグループは，7世紀中葉頃から次第に掘立柱建物に移行していったことを物語るのではないだろうか。

それでは，8世紀におけるA～Dグループの竪穴住居跡は何を物語るのであろうか。8世紀においても，A～Dのグループには竪穴住居跡が見られる。ということは，掘立柱建物への移行がなされていなかったことになろう。そのことから，集落上層＝Eグループ以外の人々が，依然として竪穴住居に居住していたと解することができる。

7世紀後葉には，綾中廃寺が建立され，青野南遺跡では，郡衙と推定される建物群が出現する。これらは当地の中心地域であるとは云え，7世紀には，掘立柱建物のみから構成される集落が出現する畿内地域とは，大きな違いがある。

Aグループについても，特徴的なことが窺える。Aグループのものは，多保市，青野，綾中廃寺，西町北大坪の各遺跡である。青野南遺跡を当地の中心地として考えるならば，綾中廃寺跡は南側，西町北大坪は西端，青野遺跡は河をはさんで北東側に位置する。多保市遺跡においても，南に次第に下がっていく所で，土師川に面しており，集落の広がりを考えた場合，その外縁に当たる。

以上のことから，小規模な竪穴住居跡であるAグループは，集落の中心には居住できなかった人々の住居と推察される。居住地を周辺部にしか求められないということが，どう

いう理由を持つのかは不明であるが，一つには，より下層に属すると考えられる人々が，Ａグループのような，小規模で，しかも周辺部に所在する竪穴住居に居住したのではないであろうか。

6. おわりに

以上大雑把ではあるが，中丹地域の８世紀の竪穴住居跡について検討を加えた。竪穴住居は，一見小型のものから大型のものまで整然とあると思われるが，中丹地域の場合，５つのグループに弁別が可能と考えられる。竪穴住居の設計に尺が導入されていたかどうかは慎重を要するが，住居規模をこの５つのグループ間で比較すると，かなりの規則性が見られる。このことから，集落内の不文律といったもので，竪穴住居の規模が限定されていたのではないかと推察した。この不文律は，一つの可能性として，階層差が集落内にあったからこそ必要であったものと思われ，これが小稿の５つのグループ分けに反映したのではないだろうか。

この各グループが，階層差で生じたのか，別の原因であるのかは証明し難いが，８世紀の竪穴住居跡を検討する中で一つのヒントを得た。それは，優位なグループと思われる大型のＥグループは，８世紀には掘立柱建物への移行が推定され，小型なＡグループは，弱小性・周辺性が指摘できるという考えである。このことから，一つには集落内に，優位な力を持つグループ，そのグループに支配されていたと考えられる弱小のグループ，そしてその中間層という３つの階層(注15)とも云えるグループが抽出できるであろう。

こうした階層差とも云えるものが，竪穴住居跡の規模に大きく反映したのであろう。

７世紀後葉に，綾中廃寺が建立され，青野南遺跡で郡衙が成立し，中丹地域の集落にも次第に律令体制が浸透していくと思われる。こうした状況の中で，寺院や郡衙の都会的とも云える建物が，掘立柱建物の建築を促し，弱小な者は，より周辺部へと追いやられていたのであろうか。

中丹地域における，８世紀の竪穴住居跡を通してこの地域の集落の一断面を捉えようと試みたが，掘立柱建物との位置関係や，細かな年代の検証を経ていないために，単なる推論に過ぎない結果となったようである。知識不足のため，誤認が多いとはいえ，この小稿を今後のステップにしたいと思う。

最後に，恩師である矢嶋徹輔，平勢隆郎両先生，未発表の資料の御提供や，種々の貴重な御教示を願った綾部市教育委員会の中村孝行氏，多くの御意見や示唆をいただいた先輩の伊野近富，小山雅人両氏に，末筆ではあるが，深く感謝する次第である。

（藤原敏晃＝当センター調査課調査員）

注1　中村孝行・小山雅人「綾中廃寺跡第1次・第2次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告第8集』 綾部市教育委員会） 1981.3
中村孝行「綾中廃寺跡第3次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告　第10集』 綾部市教育委員会）1983.3

注2　住居跡・土坑の一括出土のものを重視したため，型式的に古いものが残る場合も編年案に入れた。

注3　『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ） 1966
中村　浩「編年的考察」（『和泉陶邑窯の研究』柏書房） 1981

注4　住居跡には4つの柱穴がある。これが住居跡に伴うものか否か，遺物等検討中であり，不明とした。

注5　注4と同じ

注6　中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告　第9集』 綾部市教育委員会） 1982.3

注7　中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告　第9集』 綾部市教育委員会） 1982.3
綾中遺跡発掘調査概報によると，「青野型住居跡」とは，基本的には方形の竪穴式住居跡であるが，四隅のうちの1つを掘り残し，内側へ突出させ，この部分にカマドを設置するものである。

注8　中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告　第9集』 綾部市教育委員会） 1982.3
中村孝行「青野南遺跡第3次・第4次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告　第10集』 綾部市教育委員会） 1983.3

注9　注1と同じ

注10　注1と同じ

注11　山下潔巳ほか「青野遺跡A地点発掘調査報告書」（『綾部市文化財調査報告　第2集』 青野遺跡調査報告書刊行会） 1976.7
南谷一寿ほか「青野遺跡第3次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告　第4集』 綾部市教育委員会） 1978
中村孝行「青野遺跡第4次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告　第8集』 綾部市教育委員会） 1981.3
中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」（『綾部市文化財調査報告　第9集』 綾部市教育委員会） 1982.3
辻本和美・増田孝彦・小山雅人「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報　第6冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1983
辻本和美・小山雅人「青野遺跡第8次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報　第6冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1983

注12　未発表である，西町北大坪遺跡調査委員会資料を拝見した。これは，1986年3月刊行「綾部市文化財調査報告　第13集」に掲載予定である。

注13　辻本和美・小山雅人「青野遺跡第8次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報　第6冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1983

注14　Eグループより大きなものについては，住居跡No.27など，報告者も公共的な建物の可能性について推定しており，今回は除外した。

注15　この3つの階層差がどこまで身分的なものと関わるかは不明と云わざるをえない。特に中間層のものがどういったものかは，今後の検討が必要であろう。